

(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構  
平成20年度 21世紀文明シンポジウム報告書

# 21世紀の日本人の生き方を考える

— いま問われる規範意識とは —

## ● ● 目 次 ● ●

● 開催概要 .....	2
● プログラム .....	3
● 講師等プロフィール .....	4
● 主催者挨拶 .....	7
● 基調講演（要旨） .....	11
● パネルディスカッション .....	13

---

## 開催概要

---

### 趣 旨

(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構では、21世紀の諸課題について、行政関係者・県民等が一堂に会し、幅広い観点で議論を深めるために、21世紀文明シンポジウムを開催する。

日本は、20世紀の高度経済成長、続く成熟社会の中で、様々な価値観を取捨選択してきだが、現在、電車などの公共空間の中での迷惑行為や家庭内での殺人などの家庭崩壊等、今までの価値観とは違う、新しい日本人の規範意識に変化が生じている。そこで、今回のシンポジウムでは、私たちが守るべき21世紀の規範意識について、学識者の議論を通じて、知識を深めていく。

テーマ 「21世紀の日本人の生き方を考える

— いま問われる規範意識とは —

開催日 平成21年2月20日（金） 13:30～16:30

会 場 クラウンプラザ神戸 ザ・ボールルーム

主 催 財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構

後 援 朝日新聞社・神戸新聞社

参加者 約280名

---

## プログラム

---

13：30 主催者挨拶

貝原 俊民 (財)ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長

13：40 基調講演

「世界の中の日本人」

曾野 綾子

小説家

14：50 休憩

15：00 パネルディスカッション

〈コーディネーター〉

野々山 久也 (機構研究統括・甲南大学文学部教授)

〈パネリスト (50音順)〉

玉岡 かおる (作家)

山極 寿一 (京都大学大学院理学研究科教授)

山田 昌弘 (中央大学文学部教授)

16：30 閉会

---

## 講師等プロフィール

---

### ■基調講演

講師：曾野 綾子

小説家

#### 略 歴

日本文芸家協会理事、内外情勢調査会理事など

東京生まれ。三浦朱門と結婚。聖心女子大学英文科卒業。著作に『無銘碑』『アラブの格言』『貧困の光景』『謝罪の時代』など多数。文化功労者、ヴァチカン有功十字勲章、ダミアン神父賞、海外邦人宣教者活動援助後援会代表として吉川英治文化賞、読売国際協力賞など多数受賞。

### ■パネルディスカッション

コーディネーター：野々山 久也

(財)ひょうご震災記念21世紀研究機構研究統括・

甲南大学文学部教授

#### 略 歴

兵庫県男女共同参画社会審議会委員、兵庫県青少年愛護審議会委員など

大阪市立大学大学院生活科学研究科修士課程修了。博士（社会学）。桃山学院大学社会学部教授、イリノイ大学大学院社会学文化人類学研究科客員研究員を務める。著作は『家族福祉の視点』『家族社会学の分析視角』『現代家族のパラダイム革新』など多数。

パネリスト：玉岡 かおる

作家

略 歴

三木市生まれ。神戸女学院大学文学部卒。加古川市在住。執筆のかたわらテレビコメンテーターでも活躍中。著作『夢食い魚のブルー・グッバイ』（新潮社）『をんな紋』（角川書店）『自分道』（角川ssc新書）ほか著者多数。'89年、神戸文学賞受賞、'00年加古川市特別文化賞、'06年兵庫県文化賞をそれぞれ受賞。本年2月、『お家さん』で織田作之助賞を受賞。

パネリスト：山極 寿一

京都大学大学院理学研究科教授

略 歴

日本霊長類学会会長、国際霊長類学会会長

1952年、東京都生まれ。京都大学理学部卒、理学博士。（財）日本モンキーセンター研究員、京都大学霊長類研究所助手を経て、現在京都大学大学院理学研究科教授。アフリカ各地でゴリラの野外研究に従事。著者に『ゴリラ』『人類進化論』『家族の起源』『暴力はどこから来たか』など多数。

パネリスト：山田 昌弘

中央大学文学部教授

略 歴

内閣府国民生活審議会委員、男女共同参画会議民間議員など  
東京生まれ。東京大学文学部卒。同大学院社会学研究科博士  
課程退学。東京学芸大学教授を務める。専攻は家族社会学・感  
情社会学。愛情やお金を切り口として、親子・夫婦・恋人など  
の人間関係を社会的に読み解く試みを行っている。著作は『希  
望格差社会』『新平等社会』等多数。

---

## 主催者挨拶

---



**貝原 俊民**

財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長

主催者を代表して一言ごあいさつを申し上げます。もう今から14年も前になりますが、この地域で阪神・淡路大震災が発生し、大きな被害を受けました。この地域はもともと地勢学的な条件もありまして、わが国の国際交流の窓口のような機能を持ってきたわけですが、特にこの20世紀におきましては、日本の高度経済成長を引っ張っていくような、日本で一番大きな国際貿易港として機能してきました。そのために、ヨーロッパあるいはアジアのいろいろな文明がこの地域に入ってきて、従来われわれが持っていた日本文明との融合が行われて、一種独特のライフスタイルがこの地域にはあったわけです。

そういうところが大震災に遭いまして、あの中で私どもが一番感じたことは、今までの生き方で今後もいいのだろうかということでした。それは、一つは科学技術文明の発達に伴い、いわゆる物質文明、物質中心の考え方が非常に広がってきたということ。それからもう一つ大きな課題は、個の尊重ということでした。個人の自由を最大限に尊重しようということですと来たわけですが、あの震災の中で科学技術文明の持つ脆弱性を感じましたし、また、人間は一

人では生きていけないのではないかということをも痛切に感じたわけ  
です。

そういう中から、兵庫県ではこういった問題について震災の経験  
を生かすために研究していこうではないかということで設置された  
のが、この「ひょうご震災記念21世紀研究機構」です。私はその責  
任者を仰せ付かっているのですが、私どもの力だけではなかなかこ  
ういう大きな問題は手に余ってしまいまして、いろいろな識者の方  
に来ていただき、年に1～2回、こういったシンポジウムを開催し  
て、私どもも県民の皆さんと一緒に頑張って勉強させていただいて今  
日まで来ているところです。

今日のテーマは「規範意識」ということです。アメリカの自由の  
女神に代表されるように、個の自由ということが20世紀において、  
人類社会全体が大切な理念だと思ってきたのですが、自由だけが先  
走ってどんどん行きますと戦争になってしまう。こういうことにな  
って、一体自由とは何なのだろうか、あるいは自由はどういう自  
由でなければならないのか。こういうことを考えますときに、もと  
もとヨーロッパの自由というのも、アダム・スミスの『国富論』な  
どにしても、やはり自由の前に一つのルールというものが当然ある  
ということを前提とした自由なのではないか。そういうことを考え  
ますと、今からわれわれがそういったルールというか、社会が成立  
するための秩序が、今のように科学技術が発展して人間の力が際限  
なく大きくなってくる、あるいは経済が発展して非常に豊かになっ  
てきて、昔のようなしきたりにはなかなか戻れない中で、今後どの  
ような形でルールを作っていけばいいのだろうかということについ  
て、今日は素晴らしい先生方をお迎えすることができまして、実り



ある講演会、シンポジウムができるのではないかと、私自身も非常に楽しみに思っているところです。

基調講演は曾野綾子先生をお願いしていますが、ご承知のとおり、人間についての鋭い洞察を基にして、人の生き方についていろいろな情報発信をしていただいております。また、パネルにおきましては玉岡かおるさん、ご承知のとおり、今、兵庫県の大変大切な人の一人として全国的にも有名になっておられますが、今日は織田作之助賞という賞をもらわれまして、その表彰式とダブっているようで、終わりの方を切り上げなければならないという事情ですが、私どももそういったことにもお祝いの気持ちを込めながら、在席されている間、われわれにもいろいろなことを教えていただきたいと思っております。

それから山極先生は、このパンフレットに紹介もしてございますが、霊長類の研究をずっとされておられて、本来のわれわれのルーツとでも言うべき社会がどういうものだったのかということから、今の最先端の科学技術文明の中での生き方をもう1回振り返るということで、貴重なご意見を頂くことができるのではないかと思っております。

最後になりましたが、山田先生は、テレビでも皆さま方ご存じのとおり、今のわが国の社会像あるいは家族というものを中心とした生き方について、非常に造形の深い先生です。「規範意識」ということになりますと、そういったことが大きなテーマになりますので、これまた貴重なご意見を頂けるのではないかと思っております。

コーディネーターは当機構の野々山が担当させていただきます。野々山は家庭問題研究所長という職を長くやってきておられて、

この道での県での権威者として活躍している者です。

こういった先生方をお迎えして講演ならびにパネルが行われますので、おかげで今日はたくさんの参加者の皆さんをお迎えすることができ、主催者としても大変うれしく思っているところです。限られた時間ですので、私のあいさつがちょっと長すぎてしまいました、もっと短ければよかったと反省しておりますが、早速始めさせていただきますのでよろしく願いいたします。ありがとうございました。

---

## 基調講演（要旨）

---



### 「世界の中の日本人」

曾野 綾子

小説家

阪神・淡路大震災の日のことは、今でもよく覚えています。息子一家が岡本に今でも住んでいるのですが、後でお嫁さんから聞いた話で、当時、孫が通っていた小学校を通りがかった時に、「牛乳を持って行きなさい。」と声をかけられたそうです。「子どもは小学校6年生なので、無くて生きていけますから」と答えたのですが、そうしたら、「たくさんありますから、1本お持ちなさい。」と言ってくださったそうです。

これは、外国ではあり得ないことです。政府がただで配っても、みんな闇で売るので。

また、正しいかどうかわかりませんが、3日間ぐらいメロンパンが配られたという人がいたような気がします。3日間同じもので嫌になるのはわかりますが、世界中見回して、一つも火を使わずにそのまま清潔な食べ物を供給できる国家などは見たことがありません。

私は、本当に世界中泥棒だらけだと思っている。海外邦人宣教師活動援助後援会（JOMAS）をしておりますが、私は、日本人だけにしかお金を付けないのです。皆様から頂いたお金を使うのですか

ら、絶対に盗まれないようにしているのです。

どのようにして盗むかということ、ジンバブエでUNHCRの緒方貞子さんに、UNHCRで働いているフィールドオフィサーが「一人100万円かかるが、7人の優秀な女の子を看護学校に送ってやれば、この子たちのためにも、国のためにもなるので、何とか費用を出せないか。」とお願いしてきました。そこで、私は緒方さんに「第1年度は貞子さんが一人して、それとJOMASが一人して、二人送ってみて、うまくいったら翌年度も継続したらどうでしょう」と提案し、貞子さんもOKだったので、直接、JOMASから学校に振り込んだのですが、学長に持ち逃げされたのです。

また、象牙海岸のアビジャンで、そこのシスターに識字教育をするので、お金を出してほしいと頼まれたので、50万円を出し、そのお金がきちんと使われているかどうか査察にいったのですが、小さな小屋が建っており、その前の方に白板があり、両側にケロシンランプのようなものが燃えていて明るいのですが、後ろは真っ暗なのです。そこで、「ケロシンランプをもう1対買って、寄付したらいいませんか」と言ったら、シスターが、「とんでもありません。あの人たちは、真っ暗な夜も通ってくるので、学校の中では、できるだけ暗闇になれるようにして帰してやらなければならないのです。」と言われました。学校は明るい方がいいだろうと思ったのですが、どんでもないことなのです。

私はアフリカからたくさんのことを習いました。関西の方々も、地震からたくさんのことを学ばれて、一回り大きい人間になられたのだろうと、ですから、どうぞその体験を他の人々にお与えくださいますよう、今日は本当にありがとうございました。

---

## パネルディスカッション

---

コーディネーター

野々山 久也 (財)ひょうご震災記念21世紀研究機構研究統括、  
甲南大学文学部教授

パネリスト

玉岡 かおる 作家

山極 寿一 京都大学大学院理学研究科教授

山田 昌弘 中央大学文学部教授



(野々山) こんにちは。たくさんお集まりいただきましてありがとうございます。先ほどは基調講演で曾野綾子先生のお話を聴かせていただきました。なかなかユーモアを交えながら心に残るよい話を聴かせていただけたと思います。それを基調にいたしまして、私どもは今日輝いている先生方をお迎えして、タイトルは「21世紀の日本人の生き方を考える」であります。もう21世紀もだいぶ経過してきたのですが、まだ90年ほどはあるでしょう。そして、ちょっとギスギスしているのが最近の世の中の傾向ですが、その中で「いま、規範意識とは」というタイトルで、ひととき考えてみようというプログラムです。

私どもは震災後、先ほど貝原理事長からも説明がありましたが、震災後、この「ひょうご震災記念21世紀研究機構」と新しく姿を変えて、日本でもあまり見あたらない、もちろん、民間企業のシンク

タンクというか研究所などはあるようですが、行政が持っているものは、国のものはあっても、地方ではなかなかないと思うのですね。関西で、このシンクタンクはこれから名前を上げていきます。これから日本全体に貢献していきたいと思っております。そして、先ほども曾野さんが最後におっしゃった、震災を経験したわれわれであればこそ提言できるものが何かあるのではないか。そういうものを日本全体に、そして世界に発信していきたい。これは貝原理事長のお考えでもあるし、われわれスタッフは、それを支えていきたいと思っております。

本日はこのようなことで、実は今年度は夏前に洞爺湖サミットがありました。その時点では、環境問題で今年度第1回のシンポジウムを組んでおります。「朝日新聞」などに大きく取り上げられて皆さんもご存じかと思えます。そこで、今回は本年度の2回目のテーマです。当シンクタンクは、大きく二つの研究領域を持っておりまして、一つは「安全安心なまちづくり政策研究群」と呼んでおります。それが先ほどの環境問題のシンポジウムにつながったわけですが、もう一つは「共生社会づくり政策研究群」と申しております、そちらの方でプログラムを組んだのが、今回のものです。

最近では多文化共生をはじめ男性・女性、そしてお年寄りの方、若い人、いろいろな人たちが多世代の中で、「異質な」と言い過ぎですが、多様な人々の集まりの中で生活をしていくこととなります。そうすると、ただ単に強引に上から秩序を与えて、そしてコントロールしようとしても難しい。先ほども「個の自由」というお話を理事長がされていましたが、そういう中で私たちが合意できるものは一体何なのか。かつての何か規範とか、かつてのルールと

いか秩序というものを押し付けて、またはそれだけを論じればいい時代ではないでしょう。そういうものは一体21世紀としてわれわれが、共生という意味で共に生きていくというときにどういうことになるだろうかということ、皆さんと一緒にこの1時間半考えていきたいと思っております。

玉岡先生は、先ほど理事長からも説明がありましたが、明治から日本の近代化の中でいろいろな人々が目指した大志、「大志を抱け」の大志が玉岡さんの小説のテーマになっています。先ほどもありましたが、このたび第25回織田作之助賞を受賞されることになりました。それは『お家さん』という小説です。ぜひ読んでいただきたいと思います。私も完璧には読んでいなくて、忙しいから失礼ながら斜めに読みました。最初のところを読んで、関西弁で素晴らしい文章になっていますので読みやすい。さすが、これは賞をもらうなと思いました。その玉岡さんをお迎えしました。そういう明治の心意気から、それはご存じの鈴木商店、神戸製鋼などへと後に流れていく、そういう神戸が誇った話なのです。

そして山田さんは、私としては旧友というか、前から存じ上げている同じ分野の研究者なのですが、山田さんはご存じのように「パラサイト・シングル」という言葉を作りました。これはもう皆さん、日常用語になりましたね。その後さらに山田さんは次から次に新語を作る人ですが、「格差社会」という言葉を作ったのも彼です。今、日本は「格差社会」という言葉をマスコミが使わない日はないくらいです。さらに最近は「婚活」という言葉を作ったのも山田さんです。「婚活」というのは、就職活動を学生がするときには「就活」と言っていますが、最近の結婚の活動が、本当に「婚活」がやれるのかや

れないのかとかいうこともテーマになるのですけれども。そういう現代の奥深い動きについて、社会学者ですので、本日はその固有の視点から分析していただけるのではないかと、お話しいただけるのではないかと考えています。

その点、最後の山極さんは、明治時代の話、そして現代ということではなくて、もう少し距離を置いてみると、人類全体から何が見えるか。もともと山極さんは京都大学の教授ですけれども、霊長類学会の会長さんでもあられます。ゴリラの研究をやっていらっしゃるのですね。そしてアフリカには長くいらっしゃって、コンゴ、ルワンダ等々、今はまた新しい所でもやっていらっしゃるのですが、長くゴリラの研究をして、深いレベルの研究をなさっている先生です。そうすると、ちょっと距離を置いて人間の在り方がそこから、そういうゴリラの生態とかゴリラの社会というところから見えたとしたら、何かご提言いただけるのではないかとということで、お話を聞かせていただきたいということになりました。

それでは早速、「21世紀の日本人の生き方を考える ―いま問われる規範意識とは―」ということで、ひとときを皆さんとともに考える機会にさせていただければと思います。玉岡さんから10～15分ぐらいをお願いします。最後にちょっと時間を残したいので、よろしくをお願いします。

(玉岡) 皆さま、こんにちは。玉岡かおるでございます。今日は皆さんお忙しい中集まられて、本当によかったですね。今日は申し込みが多数で、お断りする方も出たということですから、今日ここに入られている方たちはその意味でも非常にラッキーだったと思いま





すが、私もこの場に招いていただいて、今日はとても幸運だったなという感じがしました。同じ文壇の大先輩である曾野綾子さんのお話をお伺いしつつ、演題が「世界の中の日本人」ということでしたが、今日のテーマは皆さんと一緒に21世紀を

生きる日本人を考えていこうということで、最近このテーマは非常に多いのですね。みんなが立ち止まって振り返って、それで本当にこれでいいのかと首を傾げている、それが今2009年のこの時点だと思うのですね。いろいろみんな問題を感じずにはいられない。

特に私はテレビでコメンテーターなどをしていますと、これはコメントをしなければいけないの。というぐらいのひどい事件が日常起きてくるわけです。今の日本はどうなっているのだろう。これはもう立ち止まらざるを得ないし、振り返らざるを得ないし、それから21世紀、まだ始まったばかりのこれから九十何年という長いスパン、どうやって時間を送っていったらいいか、歴史を作ったらいいか、そのことについても考えざるを得ない、こういうのが今の現在だと思うのです。それを考えるヒントを曾野さんがたくさん下さいました。日本人を考えるということは、世界の中から比較して考えるという、大きな視点を外に持っていったことで日本人というものがぐっと浮き彫りになってくるわけです。

さらに21世紀の日本人、これは私の方のテーマになってくると思うのですが、では20世紀の日本人、19世紀の日本人はどうだったのか。曾野さんは小説家で、私も小説家なのですが、私は小説を小さな説とは思ってなくて、私はいわゆる大河小説を書いていますので、大きな川のうねりのような歴史の中に入ってみると、非常に今

の現在というものがまた逆に浮き彫りになってくる場合があるのです。ですから今日は二つの視点を、基調講演からテーマを頂いた。世界から見る、それから歴史から見る。この時の流れ、空間の流れという大きな視点で、ちょっと皆さんと一緒にお話を考えさせていただこうと思っています。

私は大河小説の中でとりわけ明治というものをテーマに選んで書き続けてきたのですが、その理由は、曾野さんの講演のテーマと全く一緒です。世界の中の日本人、日本人が初めて世界という国際舞台に躍り出たときがまさに明治からなのです。それまでご存じのように日本は鎖国をやってしまして、この東洋の大陸の果ての島国の中でちんまりと暮らしていればよかった。自分たちの価値観で、自分たちの仲間で、自分たちだけが繁栄を築けばいいという状態が260年間続いていたわけですが、時の流れがそれを許しませんで、外国からあの太平洋の大海原を渡ってくる人々が強引に日本の扉を外側から開いてしまったわけです。今日皆さまがいらっしゃるこの神戸がまさにその地なのですが、神戸は最後まで、条約で一応開く港のうちには数え上げられたのですけれども、神戸は開きたくなかったのです。なぜかというと、朝廷に近いので、天皇陛下とか公家たちが神戸を開くのをしぶってしぶってずるずる引っ張っていました。ですから、横浜は今年で開港150周年の記念をするそうですが、神戸は嫌がっていましたので横浜より10年近く遅いわけです。

そのずるずるしている間にイギリスのパークスという行使が非常に短気な方で、「条約に書いてあるなら、はよ開かんかい」ということで、上海の方にいた連合艦隊を神戸沖に連れてきて、外側から空砲を撃って脅したという歴史的事実が残っています。日本人は

びっくりして、連合艦隊、要するに黒船が十数隻来たわけですから、すわ戦争かということで慌てて開いたのが神戸という、外側から無理やり開かれた町、神戸。そこに140年の歳月を経て皆さま方とこの地にいるわけですが、そのときに、私たちの先祖の兵庫人、神戸人が見たものは何だったか。神戸に来ると世界が見えたのですね。海に向こうから当時は外国の文明、進んだ文明の利器がやってきましたので、まず海の中に見えたものが黒船だった。これは本当に日本人の価値観を覆したのですね。

黒いということは何かということ、鉄なのですね。鉄だから黒い。日本人にとっては、船は白木であり、歳月を経て潮に洗われていくと茶色くなっていくのが日本の船なのですが、黒い鉄の船である。なぜあんな重たいものが浮くのだと。しかも大海原を越えてきて、これは今、140年後につけが回ってきていますが、地球を破壊して、地下を掘って、地球の資源である鉄と石炭・石油を掘って、それを燃やした蒸気で彼らはやってきたわけです。今日、地球温暖化と環境破壊という大きなつけに私たちは今直面させられていますが、西洋の文明人たちはこの黒船に地球を破壊する今日の課題をいっぱい載せて日本にやってきました。

ところが日本人は木の船、しかも動力は風であり潮であり、本当にこれはもう地球の力と混然一体になっている、エコな民族であった日本人に、地球を掘り尽くし、破壊をし、燃やし尽くし、温暖化を高めていく文明を持った連中が、どんどん神戸に外側からやってきた。この出会いから日本人の価値観というものが大きく変わってきたなということを非常に私は衝撃的に受け止めて、これを小説で書いていこうとしているわけですが、そのときに、今日曾野

さんの講演の中でも何度も同じキーワードが出てきました。ある驚きの言葉を曾野先生が何回も繰り返されたのを覚えておられますでしょうか。こんな国はないということを繰り返しおっしゃっていましたね。飲める水がじゃぶじゃぶ出る。それで顔を洗い、洗濯をしている、こんな国はない。それから泥棒をされない国、こんな国はないよと。いろいろなところでこんな日本のような国はないというサプライズを口にされていましたが、当時、黒船がやってきた時代、既に日本は世界中に「こんな国ないよ」と言われる国だったのです。

その一つが、貨幣、お金もそうだったのですね。まず黒船でやってきた人たちは、日本で物を買って、また物を売って、貿易をしようということでやってきます。物を売り買いするときには、お金をその国のレートで両替しないといけないわけですが、これは皆さんも海外旅行に行かれたら必ずその国でレートを交換しますね。今だとウォンが安いからということでもどンドン外国に旅行者が行っているようですが、当時日本もめちゃくちゃ物価が安い、レートが安い国だと思われていたようなのです。

ところが、なぜそんなふうに使われていたかということ、銀の交換レートが勘違いされてしまったからなのです。今、皆さん、私たちは紙のお金を使っていますけれども、この紙、何の値打ちもないのに1万円と書いてあって、こんなもの本当に通用するだろうかと思うのですが、通用しますよね。これは今の21世紀では当たり前のことなのですが、黒船がやってきた1860年代には、世界中ではこんな何の値打ちもないものに「日本国政府」という刻印を押してお金を通用させている国は日本だけだったわけです。ほかの国は銀の重さで値打ちを量っていた、価値を等価交換していたのです。ところが

日本の銀は江戸幕府の刻印があれば純銀でなくても混ざり物をしていただけでその値打ちがあるという、こんな国ないよという国だったわけです。ところが、彼らの価値観を持ち込まれたばかりにレートの変換比率がおかしくなって、金がどんどん流出していくという、本当に当時の日本人はインフレに泣いて、この世の終わりだということになるわけですが、そういう世界中の、どこの国もがなし得ていなかった信用貨幣みたいなものを持っていたのも日本人なのです。

当時の外国から来た駐在員の日記がいろいろ残っているのですが、それを見るとみんなが必ず書いている一文が、「こんな国、世界中にない」ということなのです。彼らが驚いているのは、極貧の農夫、本当に食べていけないという規定も曾野さんが解説してくれましたが、貧しさということはどういうことかということ、その日食べるものがないということだとおっしゃいました。日本ではその日食べるものがない百姓は「水飲み百姓」と言っていて、水を飲んで、まさに食べるものがなくその日は寝る、こんなつらいことはなかったと思うのですが、そういう極貧の生活をしている水飲み百姓であっても盗みをしないということに外国人たちは大いに驚いているのです。盗みをするとばちが当たるという一種の宗教観を持っていたのです。曾野さんはキリスト教の論法で説かれましたが、日本は260年間「宗門改め」というものがありまして、どこかのお寺に属していなければいけなかったのです。これはいい面も悪い面もあるわけですが、いい面としては、お寺が道徳の教育機関という役目を果たしていた。お寺に行くことで、罪を犯す、悪いことをするとこういう地獄に落ちるといふ地獄絵図、曼荼羅図を見せてもらって、「え

んまさんがべろを抜くよ」という、それが一種の犯罪を犯す制限になっていたのです。

プラスお寺のもう一つの意味は教育機関でした。日本人が寺子屋を持って読み書きそろばんができたということです。これは後にちょっと語らせていただきますが、鈴木商店に代表される日本の商社マン、ビジネスマン、商人たちが世界に躍り出てアジア信用される商人であるという地位を獲得するのは、260年間、高度な教育はしなかったけれども、読み書きができ、そろばんができ、そして「地獄に堕ちるよ」とか、「こういう徳を積み彼岸に渡れるよ、仏様のもとに行けるよ」という善悪を教えられた。この教育が徹底して260年間行われたために、日本はアジアでどの国もがなし得ることのできなかった近代化というものを、トップを切って西洋の列国に肩を並べることができるわけです。

その例が、私が一番最近出しています『銀のみち一条』という本に思いを込めて書かせていただいたのですが、そうやって日本の銀貨、これは混ざりけがある銀貨でありながら、江戸幕府の刻印を押しているだけで通用したという、この銀貨が通用していた時代の話なのですけれども、それが、西洋が間違っただけのレートを持ち込んだことによって日本の宝がどんどん出ていきます。これを買戻さなければいけないということで、銀を掘れということになって、私たちが住んでいるこの兵庫県の中に日本一の銀山があったわけです。ここへフランスの最新の技術をつぎ込めばもっと量産が図れるのではないかということで、フランスから高い高いお金を払ってコワニエさんという技師を招いてきたのがこの銀山なのです。

これは本当に厳しい労働現場ではありましたが、日本人ほど勤勉

に働く国民はいない、これはコワニエさんたちもまた曾野さんと同じ感想、こんな国はない、こんな過酷な労働条件で、こんなつらいところで、なのに自分の仕事に誇りを持って働く国民というのは日本人しかないということが、当時、明治政府が高い高い血税を投じて招いた外国人の技師たちが口をそろえて言っていることなのです。それまで教育機関といっても高い教育システムはないにもかかわらず、一を教えれば十を知る勢いで、どんどん西洋の文明を吸収して、生野の場合は明治10年を最後に外国の力を頼らずに、日本の力で先進の技術を導入することができるようになっていきます。わずか10年です。

さらにわずかその20年後、明治37年には日露戦争という戦争をやって勝っているのですね。これはもう世界中の人が仰天しました。わずか37年前にはちょんまげを結って刀を差していた国民が世界の不敗国といわれたロシアを倒した。実際には本土決戦をしていませんので、ロシアはそんな大ダメージは受けていないのですが、日露戦争をきっかけにロシア革命などが起こっているわけですから、実際的にはものすごい大ダメージを与えている。ロシアはご存じのようにナポレオンが攻めても落とすことのできなかった、一度も戦争に負けたことのない不敗国で、それを東洋のわずか37年前に国を開いたばかりの日本がやっつけたということで、これは世界中の人たちが「こんな国ない」とまた驚いたわけですね。

それを成し遂げたものは何か。それは260年間「太平の世を貪っていた」とか「眠っていた」という表現をよくされますが、日本人は眠っていなかったのですね。その間、津々浦々になるお寺を通じて道徳観を養い、読み書きそろばんができたことによって、こうい

う世界中を驚かす、「こんな国ないで」というサプライズを世界に与えることができるわけです。

それと同時に、私が今日賞を頂きました『お家さん』のモデルになった鈴木商店なのですが、これは兵庫県民が誇ってもいい歴史的事実の一つなのです。こんな小さな、今は地方都市といわれている港町に、日本のトップを極めた、しかも当時日本の年商に匹敵する国益を、戦争をせずに、一滴の血を流すこともなく外国から引っ張ってきた大商社があった。これはもうまさに歴史に埋もれようとしているのですが、なぜ兵庫に、神戸に、そういうことを成し遂げる夢の商社があったかということですが、彼らは何も特別なことをやっていないのです。ヨーロッパで第一次世界大戦という戦争が起きたとき、ヨーロッパが戦場になりますので物資がなくなります。それからイギリスなどでは船が欲しい。でも地球儀をぐるっと回しても、ヨーロッパ以外で船を造れるだけの技術と工業力を持った国というのは、もうアメリカか日本しかなかったのですね。

アジアの国はどうだったか。今は中国や東南アジアが力を着けてきていますが、当時はタイを除いてはもうすべてが植民地にされてしまっています。奴隷にされているわけですね。これはちょっと表現がきついですが、搾取をされていて、自分たち自身の工業力を植え付けるどころではなかった。ところが日本はいち早く近代化を成し遂げ、黒船を造る力を着けていたのです。黒船をどこで造っていたかというと、神戸で造っていました。私は、『天涯の船』という作品では川崎造船所の初代社長を主人公に物語を書きましたが、神戸のあの海でかつて日本人が腰を抜かした黒船、なぜ鉄の船が浮いているのか、なぜ鉄の船があの大海原を渡ってくるのかということ



で仰天した船を日本人が造っていたのです。しかも、それをヨーロッパに売り付けて巨万の富を得たというのがこの神戸のビジネスマンたちなのです。

なぜ巨万の富を得ることができたか。これは歴史の順序を追っていきますと、ヨーロッパ人たちと貿易をしたのは日本人よりも先に中国の人の方が早いはずなのです。中国人、インド人の商売人という人たちはもう世界中をまたにかけて活躍をされています。神戸にもいらっしやいます。華僑という名前を出せば皆さんもうなづかれると思うのですが、彼らは読み書きができ、そろばん、つまり計算もできたわけです。イギリス商人たちは、通訳兼計算ができる便利な秘書として、華僑の人たちを連れてくるわけですが、日本人たちはそれを見て、「何や、おれらにもできるやんか」というわけです。読み書きそろばん、これは江戸時代にできますから、中国人の通訳、秘書は要らないわけですね。それを直で日本人にやらせてみると、これはちょっと中国関連の方がいらしたら申し訳ないのですが、やはり国民性というものがありまして、日本人は非常に島国の中でちまちまとやってきていますから、正確で几帳面だったわけですね。しかも明治の最初に外国人たちがやってきて、極貧の農夫でもうそをつかない、だまさない、盗まないということに驚いて、こんな国民はいないということにびっくりしたように、ずるをしなかった。これが信用にかかわっていくわけですね。

信用される者、漢字をちょっと思い出していただきたいのですが、信じるというのは人偏に言葉の「言」と書きますね。「儲ける」というのはその間に「者」という、信じる者ということで「儲ける」と書くわけですね。まさに日本人はこの信じるに足る者である、こ

の条件を備えていたということです。ですから鈴木商店が日本一の商社にのし上がり、ヨーロッパでは一番知名度のある、連合国を相手に、イギリス、フランス政府、こういう国家を相手に商売をなぜできたかというのは、ただただ信用なのですね。まずうそをつかない。品物を届けてもちゃんと一定の品質のものを届けていました。それからうそをつかない。この期日にどうしても欲しいと言ったら約束を守ったわけですね。

この鈴木商店をモデルにした『お家さん』を書いてから、まさに今日のテーマ、21世紀の日本人はどうしてしまったのかという不祥事、首をひねる事件が続々と起こってきました。この本を出してすぐに偽装事件がたくさん起こりました。食の産地の偽装事件、それから船場の有名な料亭の偽装事件、いろいろな偽装事件が起こっています。うそをつかないということで信じる者とされた日本人が、どうしてしまったのでしょうか、うそをついているのです。産地偽装、中身も偽装、工業用の米を食品と偽ったりする、こんなとんでもないそもする。それから約束を破るわけですね。「確かにこれは検査しましたよね、危ないものは入っていませんよね」という検査体制を揺るがすよううそをつく国民にもなってしまった。これはどうしたらいいかということが、この大きな大河という歴史の流れが教えてくれるわけです。

もう一度私たちは立ち止まって、なぜ日本が急激に信じる者、もうける者として世界の国際舞台に躍り出ることができたか、それは日本人の美德である、盗まない、うそをつかない、偽らない、この本当に260年間、ただただ人間として当たり前のことをしてきた、その当たり前のことが今できなくなっているということの裏返し

ような気がするのです。ですから歴史を書く、読むというのは、もう皆さん「よう勉強してはりますね」とか言ってくださるのですが、勉強ではなくて、感じることなのです。その時代の人たちが、なぜこんなに一生懸命生きたのか、偉いなという、その感じることから私たちもその人たちの跡を継いでいけばいいだけのことなのです。そういう意味で、歴史の勉強は難しいですけれども、小説の力を借りて読んでいただくと皆さんも感じる事ができる。そういう意味で私はこの誇るべき日本人、誇るべき兵庫人というものをこれから書き続けるつもりなのですが、これぐらいで、まだまだしゃべり出すと止まらない機関銃の玉岡ですが、ここでちょっといったん終わらせていただきます。

(野々山) ありがとうございます。どこまで行くかなとちょっと不安もあったのですが。本当はもっともっと聞きたいというところなのですが。確かにそういう日本人が持っていた信頼感、信用というのは、先ほど私はギスギスと言ったのですが、日本の政治に関しても、いろいろなところで何か信用できないというか、不信感というか、その裏に何か自信がなくなっているという面もあるのです。だからなぜ、ずるをしない、うそをつかない、約束をきちんと守る、世界にもまれな国民であった日本人がこうなってしまったのか、その基礎で何が消えたのか、また何が変わったのかというときに、皆さん考えていただきたいと思います。

それでは、続きまして山田さんからお話を聞かせていただきたいと思います。



(山田) こんにちは。山田昌弘でございます。規範意識についてということなので、1枚、「命軽視の時代」という、これは確か成田山新勝寺が出している雑誌に書いたものですが、これにも多少触れつつお話ししていきたいと思います。

そうですね、世の中もだんだん変になってきて、私がですよ、文部科学省の徳育を考える懇談会の委員なのでですからね。野々山先生はお笑いになるかもしれませんが、私は多分徳というところからはちょっとかけ離れた人間なので、なぜ選ばれたか分からないみたいな話もしたのですが、逆に言えば私が選ばれるくらい、よほど文部科学省も慌てるようになった時代になったのかなと思っております。多分、曾野綾子さんの言い方から言えば世界並みになりつつあるのかなという気もいたします。

その話をこれからするわけで、玉岡さんも「こんな国ないよ」という点を述べたのですが、私も野々山先生と同じく家族社会学者をやっているのですけれども、つい先日でもまた「こんな国はないよ」と言われたのは、あるところで少子化等の話をして、フランスだったかアメリカだったか忘れましたが、日本では今や5組に1組ができちゃった結婚だという話をしたら、「なんて律義だ」と言われました。5組に1組ですからもう珍しくも何ともないのですが、「子どもができたと言えばちゃんと男性は結婚してくれるんだ」と欧米の方は非常に驚いていました。それがまず一つです。

もう一つは、私は自殺などの社会問題や犯罪等も多少研究しているのですが、そこでもいろいろ出てくるのは、借金を返すために自殺をしてみたり、借金を返すために人から盗むというやつがい

るのですね。これは律義なのか、規範意識が高いのか低いのか分からないですよ。そんなに規範意識が低いのであれば、踏み倒せばいいだろうにとかなかなか思えないのが、いろいろ複雑な日本人の規範意識なのかもしれませんけれども、今これがなかなかうまくいかなくなり始めているというのも、グローバル化の一つの表れではないかと思っています。つまりグローバル化によって、どうも日本人の生活状況というものが世界並みになりつつあると感じられるわけです。

青少年問題でも同じだと思います。最近、若者の就職難やフリーターといった問題をいろいろ日本でもいわれるようになりまして、私もフリーター等の調査をしたのですが、それをあるところで発表しましたら、イギリス人のジャーナリストから、「学校を出て就職できないなんて当たり前じゃない。」と言われたわけです。つまり日本は1990年代半ばぐらいまでは、中卒は少ないですが、高卒であろうが、短大卒であろうが、大卒であろうが、さらには大学院卒であろうが、学校を出たら就職できるのが当たり前という、世界にまれに見る国だったわけです。だから規範意識も高かったのではないかなと思うわけですが、そういう意味で、学校を出ても就職できなかったり、正規の職に就けない人がどんどん出てきているというのは、まさに世界並みになってきたわけです。

問題は、そういうふうには足元の生活状況が世界並みになってきたにもかかわらず、われわれの考え方や社会制度が世界並みになりつつあることにはなっていないというところが一つあるのかなと思っています。そこで、思い出したというわけではないのですが、曾野綾子さんがキリスト教で行くのであればこちらは儒教で行こうと思

いまして、儒教の偉人である孟子の格言ですね。「恒産なくして恒心なし」ということを最初に文章で書いたのですけれども、つまり定まった財産や職業がなければ、定まった正しい心を持つことができないと孟子は言ったわけです。

よく考えると、孟子というのはすごく社会学的なのです。「孟母三遷」をご存じですよ。つまり孟子の母親が最初に住んでいたのは墓場のそばで、お葬式ばかりするので、別にお葬式ごっこが悪いわけでも何でもないのですけれども、そればかりしていた。次に商売をやっている人の隣に越してきたら、今度、子どもは商売のまね事をして遊ぶようになった。最後に越してきたのが、それは孟子にとって非常によかったのですけれども、たまたま学校のそばに越してきたら、学校ごっこをして遊ぶようになって、勉強するようになって孟子ができたというお話が出てきます。儒教というのは性善説で、人はもともと正しい心を持っているのだけれども、それが開花するためにはよい環境が必要である。逆に言えば、環境が悪くなればなかなか本来持っているよい心も発揮できなくなるだろうというような説を立てるわけです。

ということで、今の日本の状況を見てみるとどうかということですが、よく青少年の犯罪が話題になりますが、私も50歳になりましたが、今一番増えているのは高齢者の犯罪なのです。高齢者の検挙率がここ10年の間に数倍、少年犯罪の比ではないぐらいの割合で拡大しているわけです。だから私も文部科学省の委員会で、今は青少年の非規範的意識も問題だが、高齢者の規範意識もおかしくなっているから、高齢者の方の生涯教育も考える方がいいのではないかという話もついでにしました。

それから、子どもというのは親というか大人の背中を見て育つものだから、大人の世界で規範意識が弱まっているのに、子どもにどういう教育をする、先日の国会で問題になりましたように、財務大臣がああいうふうになってしまって、子どもに何とさえいえるのか。「お酒を飲んで酔っ払っても財務大臣になれますよ」などとやはり言えないでしょうということになってしまいます。だから逆に言えば、私は家族社会学をやっていますが、子どもに対してどうこう言う前に、大人の世界も含めた今の社会の状況というものがうまく規範意識を育てるものになっているかどうかということをもう一度考えてみようと言ってきているわけです。

ちょっと雑談もしますと、私は宝塚が好きで、昨日も実は宝塚を見にいって来て、1泊して今日来たのですが、昨日は1920年代のニューオーリンズの白人と黒人のハーフの人が主人公で、まるでオバマ大統領を彷彿とさせるような感じで作ったようなものですが、やはりそこでも、曾野綾子さんの話と似たようなことがいわれるわけです。「もう犯罪に手を染めざるを得ない、ではどうしたらおれたちは食っていけるんだ」というような話から始まっているわけですね。犯罪に手を染めなければ生活できないし、売春とかそういういかがわしい仕事をしなければなかなか生活できないとなれば、それに手を染めざるを得ないという状況があるわけですね。

先ほど高齢者の犯罪が増えていると言いましたが、やはり今、高齢者の全体としては、平均すれば豊かなのですけれども、やはり高齢者の中での経済格差は広がっています。中高年、40代、50代の経済格差はあまり広がっていないのですが、20代、60代、70代の経済格差は広がっています。そういう中で、結局、高齢者の犯罪というと、

かなりの部分がスーパーでの窃盗で、何を盗むかというとはムなのです。そういう番組をやっていて、高齢者の犯罪の裏側、現場などというルポルタージュをやっていて、何を盗んだかを見ると、こういう中からハムの塊がごろごろと、これを見て悲しくなりましたよね。なるほど、ここで窃盗した高齢のご婦人や紳士の方々は、家に帰ってこのハムで1カ月おかずにして食べていくのかなという感想を持ちました。

「こんな国はないよ」と言いましたが、やはり1990年代ぐらいまでは皆さん、恒産を持っていたのです。それが職業であったかもしれないし、孟子も貧しいことが犯罪を生み出すと言ったわけではないのです。定まった財産があるかないか。つまり将来の生活の見通しが立っているか立っていないかというところが、人間の心の安定には一番必要だと言った教えだと私は解釈しています。それを考えてみますと、日本はとにかく対外的な支配を受けた経験というのは占領期に一部ありましたが、だからといって別に根こそぎ持っていかれたわけでもないし、自分の持っている田畑や財産が何の断りもなく取られたなどというようなことは、個々の事件はあるかもしれませんが、結局有史以来なかったわけです。

そして明治以降、戦後近代化しても、理不尽に何か財産が取られることはないし、戦後に限って言えば、一人前の大人が普通に働きさえすれば、必ず職はあって、将来の生活が一生保障された。農家であろうが、自営業であろうが、これはいい意味でも悪い意味でも保護があったので、伝統的に仕事をこつこつやっていたら、必ず豊かではなくとも安定した生活が保障されたという世界にどうも1990年代半ばまでは生きていたらしい。しかしグローバル化の波という



のは怖いもので、もうそれがもたなくなったのが97～98年ぐらいからだとは私と思っています。自営業は衰退し、年金もそれほど額が増えなくなるし、中高年のリストラは行われるし、それに引き続いて結婚しないとか、できない人や離婚する人が増え始めてくる。

離婚だって好きで離婚するという形で離婚できるという人はいなくて、私が離婚調査をしてびっくりしたのは、夫が失業したので子どもを連れて実家に帰ったという形の離婚が最近どうも増えているらしいということが分かりました。つまり、離婚というのは単なる好き嫌いの問題ではなくて、どうも離婚の増大というのも経済問題がかなり絡んでいるらしい。児童虐待というのもそうですよね。昨日も2008年の児童虐待が史上最高になったという記事がありました。が、貧しい親が実際に増えているのです。私は一応学者ですのでデータをきちんと分析して今度発表する予定なのですが、やはり子どもを育てている親の経済状況が、1994年と2004年の間では平均で大体年収にして数十万円ぐらい落ちてしまっているのです。多分どの世代よりも落ちが大きいわけです。つまり、今まで普通に子どもを育てていると思ったのが、いきなりリストラされたり収入が低くなったりしていれば、それは子どもにかまっていられなくなって、うるさくなれば殴ってしまうだろう。親自身が将来の生活の見通しが見つからないときにしっかり子どもを教育しろと言っても、だって親自身が将来5年後、10年後、どうなるか分からないのですから。それが起きているのが今の日本社会だと、足元で起きているということをもまず念頭に入れなくてははいけない。

もちろんだからすぐお金をやればいいのかどうか、仕事をやればいいのかというようなことではないのですが、少なくともそ

れを念頭に置いた対策を打たないと、また曾野綾子さんから「またお国に頼るのか」などと言われるかもしれませんが、でもなかなか人々の間からは大きな社会変化に対する対策というのは出てこれないのではないかと考えております。

ちょっと言葉足らずですが、取りあえずこの辺で終わらせていただきます。

(野々山) ありがとうございます。今、山田さんからは、1990年ころまでは、「恒産なくして恒心なし」という意味での、恒産というのはいろいろな意味で使われて財産という意味というよりも、それなりの生活の見通しをつけることができるような状況、それがあったということ。例えば、みんなそれなりに給料も上がっていくし、そして学校を卒業したら職業にも就くことができた。けれども、今日では徐々にそれができなくなっている、と。年収などもずっと減少していく状況になっている、と。

その原因を一つの言葉で言ってしまうと「グローバル化」ということになるのですが、グローバル化のお話は、それほど詳しくなかったのですが、以前は八百屋さんがあったり、魚屋さんがあったり、お菓子屋さんがあったりしただけけれども、そういうものはほとんどなくなってしまって、スーパーが全部扱うようになる。そういうふうになっていくプロセスは、身近な中ではグローバル化の影響だろうと思うのですが、もう一つ大きくは、やはり日本の大きなそれぞれの企業が国際的に他の国と競争しなければ生きていけないことがグローバル化だと思うのです。そういう中で生きていこうと思うと、もう日本人たちの給料は高すぎるので、こんな高い労働

力を使っていたら国際競争で負けてしまう。では東南アジアの国々に会社を移してしまおうかという、「いや、そうはしないでくれ」と、政府は何とか、特にこの間、大平内閣以降ずっとやっていると思うのですが、小泉内閣などは徹底的にやったと思うのです。なるべく派遣労働者にして給料を安くしてでも日本に残ってくれ、と。そういう形をやって、そういう意味であまり日本から外へ企業が出て行かなかったと思うのです。

そういう意味では、それなりに派遣の効果はあったのだけれども、実際は、企業はその人たちを正社員にはしませんよね。現実にも、今のような不況や金融危機という状況になると、どんどん派遣を切りますよね。それはどういうことかという、東南アジア並みに日本人の生活というか労働賃金を下げるということになるのです。だからずっとこの間、日本人の生活レベルは東南アジアの労働者並みにしないと競争力は維持できなかったということがグローバル化ということになるのです。その現実の中でいろいろ身近な八百屋さんなど、そういうものが消えていくというプロセスだったと思うのですが、その中で、やはり職業も、ある程度年齢の上の人たちはいいですが、若い人たちはどんどん切られていっているわけですね。そういう中で起こってきている現象は、やはりきちっとしたなりわいや生活の見通しが無い限り、規範意識についても「衣食足りて礼節を知る」という言葉でも、儒教で行くと、山田さんのお話のように、それになるかなと思います。

それではもう少し距離を置いて、人類の出発点のような話から見るとどうかというのが山極さんの専門ですので、お話を聞きたいと思います。



(山極) 皆さん、こんにちは。日本人論ですごく盛り上がってしまったので、なかなか古い時代に返るのは難しいかなと思っていますが、ずっと遠い時代にトリップしてみてください。曾野さんのお話を大変楽しく聞かせていただきましたが、一

面すごくじくじたる思いがあるのです。私はこの30年ほどアフリカでゴリラの調査をずっとやってまいりました。ですから、私の体の半分はアフリカ人だと思っています。アフリカの現地語もべらべらにしゃべれますし。曾野さんのお話を聞いていて、曾野さんは随分アフリカで苦勞されたのだなと思うと同時に、もうアフリカ人はみんな泥棒だよというのはよく分かるのです。ではおれも泥棒なのだと思って聞いていました。でも、アフリカの人たちと一緒にあってゴリラを見ていると、いや、やはり同じ人間なのだということが分かります。人間というのは非常に不思議な生き物なのです。それが非常に分かります。

今日のテーマは規範です。規範というのは、書いたもの、あるいは言葉によって表されたもの、ルール。社会で生きるために必要なルールということになりますが、私はその規範の前に何か違うものがあると思っています。それは、作法みたいなものです。これは言葉に表せません。人間の社会の中で生きるためには、教えられなければ分からないこと、教えていいことがあります。しかし体験しなければ分からないこともあるのです。それが恐らく動物と人間を実は分けることなのです。人間は言葉を持っているから人間なのではない。言葉以前に人類に共通な作法というものがある。そういうことを、文化の全然違うアフリカの人たちと一緒にゴリラを見

ていると分かるのですね。そのお話をちょっとさせていただきたい  
と思います。

われわれ人間社会がどこで動物と違うのかというと、それは「共  
感する社会」と言ってもいいと思います。では、共感というのはど  
うやって覚えるのかといたら、自分の欲望を抑制して相手の身にな  
って見ることなのです。では、最初にどういう地点でそれを感じ  
ていくのかといたら、自分の生理的な欲望を抑える心を学ぶこと  
から始まります。それは食べるという行為なのです。実は、人間の  
子どもたちには非常に難しいしつけというものがあります。それは、  
子育てをしたことがあれば誰もが知っていることだと思いますが、  
下のしつけです。人間以外のサルや類人猿を研究していると、これ  
は大変だろうと思うのですね。実は人間の体というのは、まだほ  
かの類人猿やサルたちと同じようにできています。味覚もそうで  
すし、食べるものもそうです。霊長類というのは植物とずっと共進化  
を遂げてきたのですね。共進化というのは共に進化を遂げてきたと  
いう意味です。利用し、利用される間柄で来たということです。

では何だと言いますと、類人猿もサルも人間も甘い果実が大好き  
です。美空ひばりの歌にリンゴを歌った歌があって、私は大好きな  
のですが、なぜこういう甘い果実（フルーツ）を人間が好きかとい  
うと、それは植物にだまされているからです。あるいは植物と一緒  
に進化してきたからです。植物側はおいしいフルーツを用意して  
人間に食べてもらおうとしているわけです。なぜならば、植物は種  
をまかなければ増えません。しかし、植物は動けない。だから、サ  
ルたちに甘い果実を食べてもらって種を運んでもらおうとしている  
わけです。ですから、種なしブドウとか種なしリンゴなどを作った

ら、それは本当は植物に対する虐待なのです。

われわれがおいしいと思って果実を食べて、そしていろいろな所にうんちをして種をばらまくというのは、植物側が用意した私たちの役割なのです。種がそのまま実として植物の下に落ちると芽生えません。たくさん植物に特有の虫がついてしまったり、あるいは植物自身が競合者としての自分の子孫をなるべく増やさないように毒物を出している場合もあります。ですから増えない。あるいは日光が差さないから実生が出ない。サルが食べて遠い所に、しかも条件のいい所にその種をうんこと一緒に、つまり肥料と一緒にばらまいてくれることが必要なわけですね。

人間の体もそのサルと同じようにできている。なぜならば、3食食べなければいけない。毎日食べなければいけない。セックスはしなくても一生生きられますが、毎日食べなければ人間は生きられないわけです。先ほどの曾野さんの話にもありました。玉岡さんの話にもありました。水飲み百姓、水を飲んで寝るといのはつらいことですよ。人間は毎日食べなければいけない。それはサルの体だからです。サルは毎日食べるようにできている。そして毎日糞をするようにできている。最近では便秘で3日ぐらいうんこをしない子どももいますが、でもそうなのです。そして、実は人間の体というのはいろいろな所にうんちをするようにできているわけです。気ままにうんちをするようにできているのです。初めはね。

しかし、人間の社会というのはそれを許しません。これは農耕が始まって以来のことだと思います。ですから、人間の子どもは最初は垂れ流しです。だからおむつをしなければいけない。けれども決まった時間に決まった場所でうんちをするような訓練を受けるわけ

です。これはしつけをされる。恥ずかしいと思う。人前でうんこを垂れてしまったら恥ずかしいわけですよ。小学校でまだうんこを垂れている子どももいますが、これはやはりすごく恥ずかしい思いをするわけです。そうやって人間は覚えていく。これはしつけです。みんなが知っているしつけ。これをしなければ人間は大人になれない。

それから、もう一つ大事なしつけがあるのです。それは、食卓を囲んで楽しく食べることです。これは実はしつけられなければいけないのです。これを皆さんは恐らく忘れていて。サルを見ていると、食卓を囲んで一緒に食べるなどという光景は絶対に見られない。食物を目の前にするとみんな緊張が走るのです。ほかの者に食べられたくない、自分で何とか独占したい。だけど強いやつに取られてしまう。どうやったらおいしいものを自分だけで食べられるか、それがサルの食べ方です。しかし人間は違いますよね。全く逆のことをしている。わざわざ他人とけんかをしそうな食物を目の前に持ってきて、みんなで仲良く食べようとするわけですね。しかも談笑しながら。こんな不思議なことはサルの世界では絶対に見られない。類人猿の社会、ゴリラやチンパンジーでは食物の分配というのがありますが、たまにしか起こらないし、なおかつ「くれ」と言わなければ絶対にあげないのです。人間というのはわざわざ相手に対してお土産まで持って行って、「おまんじゅうを一緒に食べましょう」とやりますよね。あるいは花見に行つてごぞを広げて食べ物を用意して、お重を持って行って、みんなでお酒を飲んで歌を歌って食べますよね。こんな動物は全くいません。

しかも、もちろんライオンやオオカミや肉食動物はみんなで肉を食べるといことをします。これは食べだめが利く。しかも肉とい

うのはそんなに簡単に得られるものではない。しかし、人間もサルも基本的に植物食です。毎日食べなければいけない。そういうものをわざわざ相手の前で食べるというのは、これはすごく不思議な行為なのです。だから子どもたちは、先ほどのうんちではないですが、初めは食べたいものを自分で独占したいのです。だから取ったものは離さない。けれどもそれを兄弟や友達や親や親せきと一緒に食べることによって、自分が食欲を抑制して譲ることがある。あるいはみんなの目の前で行儀よく食べることが、和やかな食卓を囲むことにつながる。それで相手が自分のことをどう感じているかということを知っていくわけです。これが共感の最初です。これは体験してみなければ分からない。体験してみなければ分からないから現場でしつけるしかないのです。幾ら口で言っても、食べる状況でそういうことをやらなければ分かりません。これは非常に大切なしつけです。

曾野さんは先ほどアフリカ人は大変だと言っていました、私は、なぜいろいろなアフリカの文化に滞在しながら人間は同じだと思ったかという、この食に関する文化はみんな共通なのですね。先ほど曾野さんは洗面器みたいなところに穀物みたいなものを入れてわーっとみんなで一緒に食べると言っていましたね。あれを僕もやったことがあるのです。これはもう食卓以上に、相手がどのくらい取るのか、自分がどのくらい取れるのかということの頭の中で一瞬のうちに計算するわけです。それでどんどん食物がなくなっていく。遠慮をしなければいけないし、他人と目が合って、そのときにどのくらい取ったらいいかを覚える。これは本当に感覚です。相手の気配、相手の気持ちというものをそこで瞬間的に感じていかな



ければ、そのあんばいというものができないわけです。そのあんばいをすることによって、実はものすごくいい友達になれるのですね。

ですから、そういう経験をした後、私はアフリカで狩猟採集民の人たちとゴリラの後を追っているわけですが、あるとき狩猟採集民の人たちが象をつかまえて私のところに分配を持ってきてくれました。肉の塊なのですけれども、「おい、何でこんなもの持ってきたんだ。」と言ったら、「これはおまえの分だよ」とくれるのですね。だから、本当にこう家族みたいになってしまうと、よく言うのですが、「おれのものはおれのもの、おまえのものは私たちのもの」。これは言い尽くされていることなのです。でも「私たちのもの」という中に自分が入っていれば、それはものすごく温かい世界なのです。それが人間です。それを人間の子どもたちは覚えていくのです。一緒に食事をする。食事、こと、行為です。それをやりながら覚えていくわけです。それによって、実は社会的に仲間と一緒にどうやって生きていったらいいのかということを感じとして覚える。

私が懸念しているのは、突然日本人の話になりますが、これが崩れていっているのではないのかと思うのですね。今は孤食が非常にはやっている。これは別に食卓を壊そうとして孤食がはやったわけではなく、もっと経済的な理由からです。そもそもは母親の負担を減らそう、あるいは働く時間が非常に多岐にわたって、夜になっても働く人がいる。残業する人がいる。そういう人たちが好きなときに好きなものを食べられるように、しかも簡便に食べられるようにコンビニがはやった。あるいはテレビや携帯といういつでもコミュニケーションができる、見ることができるようなものがあって、楽しみをみんなで分かち合えるような工夫がなされてきて、みんなも

それに乗っていった。しかし、実は食事というものがコミュニケーションの場であるということをもみなそれによって忘れてしまったわけです。子どもたちはその輪から初めから外されて、コミュニケーション、つまり本当に大事な「共感」というものを育てるような場を経験していない。それは、私は非常に規範ということを感じる意味でも問題ではないかと思っています。

規範というのは善悪です。しかしその前に、善悪ではなくて感情の世界、感じる世界というものがあると思います。これは規範を覚える上でも重要なのです。人々が自分はどうしたらいいのか、どういう行動を選んだらいいのかということを判断する際に、いいか悪いかという解が幾つかある場合に、こういうことをしたら他人にどう思われるだろうということを一瞬のうちに頭に抱くそうです。だから、その判断は善悪ではないのです。嫌われるのではないかとか、すごく非難されるのではないかとというようなことをふと思ったことが自分の行動の判断になる。それが結局は規範というものにつながっていくわけです。

ですから、善悪のルールの前にやはり共感、日本語では非常にいい言葉がありまして、「世間」と言いますが、世間がどう考えるか、どう感じるかということが判断基準になる。それが実は非常に大切なことなのだろうと思います。それを日本人は、「同じ釜の飯を食う」などという言葉が昔からありますけれども、そういう食の作法を通じて子どもたちにうまく教えてきたのではないかという気がします。

それ自体は世界のどの文化を取っても変わらない。しかしそういうものを規範にうまく結び付けて人々の和をつくってきた。それが実は全然違う理由から、徐々に壊されつつある。それはいろいろな

ものを象徴していると思いますが、私たちは、実は考えなければいけないのはもっと基本的なことです。日々の生活の中で基本的なことを本当にこれでいいのだろうか。もともとをたどってみれば人間というのはサルと比べると非常に不思議なことをしている。その不思議なことをしているところに、実は本当の人間性が宿っているのだということを思い返してみるべきなのではないだろうかという気がするわけです。

(野々山) ありがとうございます。また違った視点で、なかなか鋭い視点で、私も社会学をやっていますが、自然科学の、特に新しい霊長類学の分野から指摘していただきました。確かに規範という前に作法があるだろう、人と人の出会いの中で考えていくものがあるだろう。そういう話から、私はやはり日本はこの間豊かになろう、ヨーロッパの国々に追い付け、さらに追い越せとして、豊かな国になってきたと思うのですが、本当に豊かになったのでしょうか。そういうときにその規範や作法というものを考えると、心貧しい国民になっていないだろうかというふうに不安に思うのですが、その解答の何か一つもそこにあるかなと思いました。最後に、かつては世間体というようなものも意識してやってきたけれども、そういうものは崩壊してしまったかもしれない。世間体がよかったか悪かったかはまた別のことだと思うのですが、そういう状況です。

最初にも説明がありましたように、玉岡さんにはこれからディスカッションしてもらいたいところなのですが、本日は織田作之助賞の表彰式なのだそうです。

(玉岡) 行ってまいります。

(野々山) 今から22分の新幹線に乗られます。玉岡さん、ありがとうございました。そして、おめでとうございます。第25回織田作之助賞です。今からいっしょに、22分に乗るということで、すみません。そういうことで、われわれは続きをやっていきたいと思うのですが、玉岡さんがいっしょにいないのは残念ですが、このまま続けていきたいと思います。

山極さんのお話の、その人間の前提になるような共感というものが薄れてきているのではないか。ある本を読みますと、若者が「世間」という言葉を分かっていないのですね。分かっていないのだけれども、そのように共感するのは、「仲間」というものを意識して、例えば「ジベタリアン」といって電車のドアの所に座り込んでいる人たちは、そこに座り込むとか、また服装でもちょっとだらしない格好をしたりして、ズボンがだらけてきてしまうのではないかというような格好をしているのは、全部がかれらの世間、すなわち仲間を見ているという説もあるのですね。ここでの世間とは何なのかというと、自分たちの仲間だけなのです。その小さな仲間うちでは非常に規範意識があるというのです。われわれから見るとずれた規範意識だと思うのですが、地べたに座ることが規範になっているわけです。座らないやつは若者ではないみたいな感じで、「それ、本当」という議論もあるのですが、それが先ほどの孤食とかいろいろな、ある意味で追求してきた、展開してきた豊かさの中で何か忘れてきたもの、もう一度回復しなければいけないものがあるのではないかということです。

私は今日ちょっと大学で教授会があったので、ここに来るのにぎりぎりまで飛んできたのですけれども、タクシーの運転手に「絶対に間に合わせたいから飛ばして」と言ったら山手幹線を走ってきたのですね。山手幹線を走ってきたときにちょっと私なりに思い出したのです。「ここはかつて市電があったんだよね」「ここは今見ると商店があるけれども、かつてはもう本当にここが山手で、神戸は本当に栄えていた所はこの辺ですよ」という話を運転手さんと二人でしていたのですが、今になってもう1回復活したいねという話をしたのです。この辺りがにぎやかになって、大きなスーパーもあっていいと思うのですが、あってもいいけれども、それに負けない小さな自営業、先ほども山田さんのお話にあったのですが、自営業や中小企業といった日本ならではのものが、多分ヨーロッパから来ても、「素晴らしいものが日本にあるじゃないか」というようなものが何かできないかと思っているのです。

あと私と3人だけですけれども、ちょっと寂しい感じもします。玉岡さんには、かつての日本人の信用がなくなってしまったと、誇るべきものがあったということで、なぜそうってしまったのかということと、ではどうしたらいいのかということ、私はお聞きしたかったです。かつてはずるをしないと、うそをつかないとか、約束を守るとか、そういう信用ということが日本人にあった。ヨーロッパから来た人たちがそういうものを日本に見つけて「こんな国はないよ」と言っていた。ずっとそこまで信用していたのだということけれども、ではなぜなくなってしまったのか。そして今われわれはそれをどう回復したらいいのかとお聞きしたかったですけれども、残念です。

山田さんの先ほどのお話ですが、できちゃった婚で、「婚」というのはできてしまって結婚するのですね。ヨーロッパの国はできちゃったままなのです。「婚」しないのです。できちゃったで終わりです。場合によってはバイバイ。しかし、日本はバイバイではないのですね。できちゃったら婚姻届を出している人たちがほとんどです。日本は子どもが生まれたら結婚しているのですね。そのぐらい結婚規範がまだ画一的と言った方がいいのか、守られているというか、そのぐらい規範はあまりずれていないというか、世界的ではないということですよ。それから借金を返すために自殺するなんて、そのぐらい律義だという面もあるというようなことも最初にご指摘があったのですが、しかし大きなグローバルの流れではいろいろな問題が起きているということをご指摘いただいて、ではこれからどのようにわれわれはやっていったらいいだろうか、規範を回復したらいいのだろうか。

そして山極さんは今まさに、私もちょっとまとめさせていただくような格好をしたのですけれども、子どもたちに共感というものをさせていかないと、本当にギスギスした青少年になっていってしまう、さらにお年寄りになっていってしまうということでした。

最初、私は3名の方にもうちょっと違って、こういう深い話ではなくて、そこまでやると時間がないし、せいぜい電車の中で化粧をしているとか、電車の中で携帯を使うとか、そういう公共意識が最近目に余るねとか、それから図書館の中ではどうしたらいいとかか、映画館ではどうだとか、そういう公共マナーみたいな話の規範意識でお願いしていたのですけれども、どなたもそんな話はなさらなかったですね。もっと深くて、さすがだと思うのですが、まとめる

方にしてみたら、かなりこれは困ったなという感じですが、どうでしょう。山田さん。玉岡さんの話も、今、いらっしゃらないですが自由に語っていただいて、山極さんのお話もありましたし、ちょっと時間的にはぎりぎりなのですが、よろしくお願いします。

(山田) やはり孤食の問題は非常に大きいと思ったのは、これは多分子どもの問題ではなくて高齢者や大人も孤食している人が増えているのではないかという印象はあります。それは東大の北田さんという准教授の方が規範意識の研究をしているのですが、なんとここ20年ぐらいの間で孤立感を深め規範意識が低下したのは50代男性だと言っているのです。なぜかという、以前は企業主義と呼ばれていても、企業の中でコミュニケーションがあった。いいか悪いかはともかくとして、飲みニケーションとかそういう意味で、同僚や部下と一緒に食事をしたり話したりする機会があったのだけれども、ここ10年の間の業績主義のせいかどうか、原因に関してはよく分からないのですが、40代、50代、60代の男性がしゃべるところがなくなってしまったというのです。

つまり、家庭ではなかなか入れてくれないし、地域社会にもいないし、今までは会社の中で部下を誘ったり飲みに行っていたのがそれもなくなってしまって、どこにもしゃべる場所もないし、一人でお昼ご飯を食べているような光景も増え始めてきたことが原因になっているとも考えられます。ですから、もちろんこれから共感能力を養わなければいけない子どももそうなのですけども、もしかしたら一番規範意識等々を考えなければいけないのは、私は今51歳ですけども、中高年の男性なのかもしれないと最後に言うておき

たいと思います。

(野々山) なるほど。その話も加えて、山極さん、何かお二人の前  
の話も入れて、今お話しなさったことに加えて、よろしくお願  
いします。

(山極) 私は子どもの話ばかりしましたが、実は子どもというのは  
本当は非常に群れる能力があるのですね。それは例えば遊ぶとい  
うことに非常に長けています。人間というのはだんだん年を取ると  
それぞれ人生がありますから、なかなか一緒になりにくいわけ  
です。ですから、自分の人生を否定されるようなことを言われたり、ある  
いはそれを無視されてしまうと、なかなか一緒にはなれないのです。  
だからコミュニケーション自体を考えないと、特に男性の場合は今  
おっしゃったように、定年退職する前は非常に社会的地位が高か  
ったために、看護婦さんに子ども扱いされるとすぐむかつくとい  
うのはあると思うのですね。そういうコミュニケーションの在り方  
自体をこれから考えていかないといけない。

ただ、実は子どもの教育にとって一番重要なのはこの中高年の世  
代です。その世代の人たちが本気になって子どもの面倒を見ないと  
子どもは育ちません。しかも、人間の生活史の中で非常に面白いの  
は、子だくさんであり、なおかつお母さんではできない子育てをほ  
かの人がやる。地域社会がそれをずっと肩代わりしてきたわけです。  
それが今や学校に完全に任されてしまっています。学校の教師はも  
うあっぷあっぷして、とてもそんな昔の地域社会が請け負っていた  
教育まで任されてもできないという状態ですね。ですから、地域の



中で実は中高年が自覚を持って子どもたちに接し、子どもたちを立派に社会化しないと、恐らく規範というのは、つまり人間社会が穏やかに生きような規範というのは根付かないと思います。地域社会の再生というのは絶対に必要だと思います。

(野々山) 地域社会の再生というのは前から言われていることなのですが、具体的にどのようにしていくかということです。先ほどちょっと山田さんがおっしゃったのですが、かつては中高年の男性たちは飲みニケーションというか、「そろそろ時間になったから、今日はどこで飲もうか」ぐらいのことを考えている。女性の人たちであれば「もう太郎ちゃんは帰っているかな。カーテンを閉めてくれているかな」「洗濯物を入れてくれているかな」と考えるのが普通。ですが男性の場合は、どこで飲もうかと考えているくらい、飲みニケーションとかコミュニケーションを考えていたのかもしれませんが。けれども、先ほど山田さんがおっしゃったように、グローバル化の中で非常に業績主義的な企業が増えてきている。その中で互いが競争の相手になってきている。飲みニケーションなどやっているのが難しい状況になっているのではないかなという感じがするのですね。

そして、さらに転勤もあるし、一人で食事をしたりする人たちも増えているような気がします。ではどうしたらいいのかという問題なのですよね。それは今、山極さんがおっしゃったような感じで言えば、もう一度男性たちがもっと地域で、女性たちとも、そして中高年の人たちが、もっと高齢者も含めて子どもたちともコミュニケーションを取る。コミュニケーションを取る場がないのではなくて、もっと自分たちの身近な所で見いだしていくというような、回

復の道があるのかもしれないということなのです。

最後にフロアからも聞いてくださいという意見もありますが、私は玉岡さんがもう少し残っていただくと話が発展したとは思ったのですけれども、私自身が結論を出そうとは思っていません。私が今ここで「こういう方向でしょう」と言って結論を出してしまうことは、道徳とか規範の問題では、すぐ反論が出てくるだろうし、やるべきではないと思うので、皆さんが考えるよすがというか、ひとときにしていただければいいかと思っています。

そういう意味では、もし何か質問とかご意見でもいいですが、10分ほどまだ時間がありますので、お受けしたいと思っています。どうぞお手を挙げてください。どなたか手を挙げるとつぎつぎと増えるのですけれども、最初はやはり遠慮されますね。もちろん理事長も結構です。理事長が手を挙げていただきましたので、では、貝原理事長から一言お願いします。

(貝原) 規範意識と直接関係はないのですが、今わが国では高齢社会を迎えて高齢者の介護が非常に大きな課題になっています。これに対して介護保険制度というものが国の制度としてできました。あれを作るときには大議論があって、私たちは日本の美しい、子どもたちが親の面倒を見るのは当然だという家庭観が壊れてしまうのではないかと。家庭の機能がなくなったから逆にこういった仕組みとしての保険制度、介護制度にしていくというのは、家族制度の崩壊を加速するのではないかという危機感を持ったのですが、現実はそのようではないのです。やはり今の日本では、あの仕組みがなければ介護ができないような条件になってしまっている。これと同じことが、

今日いろいろ議論になった規範についても状況としてよく似た部分があるのではないか。

そういった意味では、地域コミュニティやボランティアの組織など、ああいう新しい形での共生の仕組みが、震災後、非常に顕在化してきた。そういう中でこの問題についての解決の解が少しあるのではないかと感じているのですが、その辺について山田先生などはどのようにお感じになりますか。

(山田) まさに理事長がおっしゃったように、昔に戻ればいいということではないと思っています。私は1990年代まではこういうふうだったと言いましたが、では昔に戻ればいいかといっても、戻れない。なぜかというと、高齢者介護もそうなのですね。実は日本で男性の平均寿命が60歳を超えたのは、昭和30年代ぐらいです。私が生まれたころですから、今からまだ50年ぐらい前にしかすぎなかったわけです。そのころは、平均寿命が60ということは、60歳までに男性は半分亡くなっていたのです。そういう時代の介護というのは、本当に長生きした人は少なかったから家族で見ることができた。子どもの数も平均4人いましたから、一人当たりの負担も少なかったのだと思います。でも、今の平均寿命が男性78、女性84歳という時代に全部家族でやれといったら、それは家族がつぶれてしまいます。だから、逆に言えば、家族を守るために新しく介護保険制度ができたのだと思います。

ですので、先ほど飲みニケーションの話もしましたが、だからもう1回飲みニケーションを復活しろという話ではなくて、もちろん会社の中で友達をつくってもいいですし、会社の外、地域に出て友

達をつくってもいいですし、そういう意味でさまざまな場所で一緒に話したりものを食べたりするような場をどんどん作っていくということが一つの規範意識を高めるポイントになるのではないかと思います。そのためにも、こういう財団等が共生社会というものをつくり上げていく、一つのものになればいいと思っております。

(山極) 同じ意見なのですが、場づくりですよ。やはり昔なぜ老人が元気だったかということ、もちろん年もあったでしょうが、まだ若かったということもあるでしょうけれども、やはり自動車もこんなに走っていませんでしたし、どこでも気軽に会えたわけです。今は思い切って出掛けないと会えないですよ。そういう場所がない。気楽に行って用もないのにぶらぶらしながらほっと友人に会える。あるいは、初めて会った人でも気楽に話ができるという場がない。そういう場があればいろいろな計画事も持ち上がるし、楽しいこともできるだろうと思います。一番大切なのは、やはり先ほども言いましたが、十把一からげにカテゴライズされる、「あなたは老人でしょう」と言われるのは老人は絶対嫌いですから、それぞれの個性ある生き方をまっとうできるような場づくりをするということが必要だと思います。

(野々山) なるほど。答えになったでしょうか。ちょっと理事長は首を傾げていますが、ありがとうございます。まだ時間がありますので、どなたかありましたらどうぞ。ご遠慮なく。

(参加者) 最近の永田町の動きやマスコミの動きを見ていると、

日本人も本当に品性がなくなったなというのが実感です。ああいうことをテレビで見せつけられますと、子どもに非常に大きな影響があるのではないかと。だからもう少しマスコミも流していいものと、今は中川財務大臣の問題が毎日のように流されますが、それほどわれわれの生活に影響することなのか、もっと大切なことが忘れられているのではないかと私は考えるのですけれども、いかがでしょうか。

(野々山) なるほど。マスコミの影響も大きく責任があるのではないかとご指摘だと思っておりますが、どなたかにお答えいただいた方がいいですよ。ご意見だけで承っておいてもいいのでしょうか。どうですか、お二人からお答えがありますか。

(山極) 「見ざる言わざる聞かざる」とありますよね。あれは、実は子どもには悪いことを見せたり聞かせたり言わせたりしない方が、いい人生を送れるという教えなのです。ですから、日本だけではなく世界中でそのようにやってきたわけです。しかし、そういう網をすり抜けて、今のマスコミといいますかコミュニケーションは人々の生活をどんどん裸にしていますよね。その波は、なかなか止められないと思います。ただ、逆に言えばもっと体験をしてみよう。私はやはり霊長類を研究していますから、サルにとっても人間にとっても大事なことは見ることだと思います。見るということが、分かるということなのですね。ですから「百聞は一見にしかず」と言うし、見ること、一緒に体験することが実は人間の体になり、経験になり、力となっていくわけですね。そういうことを本当に一生懸命子どもたちに教えれば、どれが本当で、どれがうそのことかと

いうことはちゃんと分かるだろうと思います。そういう努力をわれわれはしっかり肝に銘じてやるべきだろうと思いますけれども。

(野々山) マスコミにいろいろな問題があるということは皆さん感じているでしょうし、私も感じています。しかし、本当は淘汰されていくべきだと思うのですね。ということは、逆にああいう番組とかああいう形でも許容している人たちがかなりいる、視聴率が高ければいいみたいな論理がありますので、だからそれだったら、視聴者に受けるからやるというようなところもあるのです。今、山極さんがおっしゃったように、やりすぎるのも問題だけれども、しかし、私も今日「あんた、司会をやるだろう。風邪ひきなさんなよ。風邪薬を飲んでやると、しどろもどろになるよ」とか冗談を言われて、「風邪ひいてないからいいよ」とか言って出て来ているのですけれども、そういう笑い話みたいにされている状況ですよ。

確かに、私はマスコミのことについてはおっしゃるとおりだと思うので反対の説を言おうとしているのではないのですが、では何かいい秩序をつくり上げてしまえば、そういうシステムでもうみんな右向け右でやればいいのかというと、そうではないのかもしれない。今、理事長がおっしゃったことの内容も、私はそういうふうを受け取ったのですが、実はやはりかつての規範というと、みんな一つにまとめて、みんな右を向いているとか、みんな左を向いているとか、同質なものがいいみたいに言っていたのです。そうかなという気もするのです。ご批判をお二人からも頂きたいと思うのですが、異質な人たちがいることが前提で、多様な状況の中で新しい時代に入って、例えば子育てについても、介護に関しても、「当然息子がやる

べきでしょう」「嫁がやるべきでしょう」と言える時代ではない。そこで介護保険が要るよというシステムになったのではないかなというのには理事長の今のご意見ですが、私もそのとおりで、動いていっていると思うのですね。

そうすると規範も、では「かつてはよかった」と昔に戻せばいいのかというわけでもない。しかしかつて日本人が持っていた誇りは今も回復したいし、ではどのようにわれわれが21世紀を生きていけば、どういうルールを作って共に生きる社会をつくろうかということ。そのことを考えるチャンスにしたいと思っていました。私は、少しはそのようなチャンスになったのではないかと思うのですけれども、いかがでしょうか。時間がちょうど過ぎたのですけれども。結論になっていませんけれども、そういう時間に少しはなったかなと思うのですが。

どうもありがとうございます。無理に拍手をさせて。先生方、どうもありがとうございました。



平成20年度 21世紀文明シンポジウム報告書

**「21世紀の日本人の生き方を考える」**

— いま問われる規範意識とは —

発 行 平成21年 4 月

編集発行 (財)ひょうご震災記念21世紀研究機構  
学術交流センター

〒651-0073

兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5番2号

TEL : 078-262-5713 FAX : 078-262-5122